

17-10 授業解題

島名：グローバル・ヒストリー

教科（領域）：国語、英語、理科

単元（教材）：古典を科学する

対象：高校1・2年生

授業者：川井亮、岡本幹、佐古孝義

1. グローバル・スタディーズの観点からみた本授業の「強み」

○本授業は、「香り」を軸にヨーロッパとアジアの文化を比較史的に捉える試みであると同時に、国語（古典）・理科（化学）・英語の教科横断的に試みである。

○公開授業では、導入部で香りに関わるいくつかの英語の語源が説明された。ただ英単語を解説するのではなく、世界史的な背景との関連づけがなされ、長期的・広域的な視野で香り文化に取り組むための足がかりが効果的に築かれていた。

○続く古典のパートでは、日本の古典の世界で「香り」がどのように扱われ、表現されたのかが解説された。その際、実際にお香を配り、視覚と触角を通じて古典の世界を想像させる工夫がされていた。そのうえで、お香の会社「松栄堂」からのゲストスピーカーに、香木の由来について講話を頂いた。香木は日本ではもともと手に入らず、古代からアジア貿易の主要な交易物であったことが説明され、香木というモノを通じて日本が古代から周辺世界とつながっていたことが効果的に示されていた。

○最後の化学では、「香り」に関するそれまでの英語と古典の授業を踏まえたうえで、実際に自分たちで香りを合成するという実験が行われた。

○グローバル・ヒストリーにとっての本授業の最大の強みは、お香に触るだけでなく匂いを嗅ぎ、また化学的に香りを合成してみるなどの実感を軸にした授業を通じて、「さわれる歴史」という当初の企図を超えて「嗅ぐ」というヴァリエーションをもたらしている点にある。

2. グローバル・スタディーズのカリキュラム開発にむけて

○「香り」を題材とした本授業の工夫は、歴史学の先端を行く学者の試みと重なるという点でも興味深いものだった。例えばフランスの社会史研究の第一人者アラン・コルバンの著書『においの歴史 嗅覚と社会的想像力』でも香りが題材とされている。コルバンはそこで、ヨーロッパでは1760～1840年頃に「嗅覚革命」ともいうべき変化がおき、麝香のような動物性のきつい香りが排斥されて衰退する一方、ヒヤシンスなど植物性のほのかな香りが好まれるようになったこと、そしてそうした変化の背後にある社会の変化を明らかにしている。

○本授業のような試みにおいて、歴史学でもこうしたアプローチがとられていることを強調し紹介できれば、歴史を「暗記もの」と思い込み、敬遠している生徒の意識を変えることにつなげることができるように思われる。その意味でも発展性のある公開授業だった。